北の縄文文化回廊
に向けたクラブ活動

北の縄文CLUB
HOKKAIDO
MINAMIKAYABE

通　信

第　25　号

カックウ土鈴

目　次

１．はじめに……2
２．令和４年度活動一覧……2
３．各活動内容・体験記……３～５
４．関連活動など……６～７
５．寄稿 ……７～８

１．はじめに

令和４年度は、感染症対策など諸事制約のある中でも以前のような活動に近づけたいと模索する日々でした。今後、活動の参加者や他団体との交流・協力についても懸念を少しでも解消していこうと決意を新たに北の縄文CLUBの運営を進めてまいります。

ここに、会員の皆様に感謝いたしますとともに、活動への参加、当会へのご協力をお願いいたします。以下、令和４年度の活動内容を報告いたします。

２．令和４年度　活動一覧

活動日	主 な 活 動	参加人数	活動場所
４月23日	大船遺跡周辺清掃	13名	史跡大船遺跡連絡市道
５月22日	第25回 北の縄文CLUB　総会	10名	南茅部総合センター
６月11日	カックウの顔・土鈴づくり	10名	南茅部総合センター
８月20日	縄文土器づくり	8名	大船遺跡体験広場
10月15日	縄文土器野焼き	15名	史跡大船遺跡
２月25日	シーニックdeナイト	15名	函館市縄文文化交流センター周辺

（関連活動）

４月27日　　南茅部支所地域振興課（ 世界遺産を生かした地域づくり懇談会 ）

４月29日　　シーニックバイウエイ北海道　函館・大沼噴火湾ルート

　　バイパス沿線の清掃活動・プランターへの花卉植栽　（ 縄文文化交流センター ）

７月23日　　カックウの顔づくり指導（ 縄文DOUNANプロジェクト ）　4名

８月　１日　　函館市市制100周年記念式典出席

9月3･10日　　野焼き用薪積直し・裁断作業

９月26日　　縄文DOUNANプロジェクト懇談会　土器づくり指導

10月２日　　はこだて 縄文まつり（ 参加・協力　8名 ）

10月12日　　土器野焼き用レーンづくり作業

10月29・30日　南茅部地域文化祭へ出品（南茅部総合センター）

１月19日　　南茅部支所地域振興課（ 世界遺産を生かした地域づくり懇談会 ）

２月６日　　渡島総合振興局生活課　冊子作成取材

２月７日　　令和4年度 函館市縄文遺跡群保存活用協議会

３．活動内容

（１）清掃活動

４月２３日（土)、国道278号から大船遺跡へ連絡する市道の清掃活動として、函館市教委と道南歴史文化振興財団の方々とともに、道路縁の草取りと土砂の除去を行いました。

（２）第25回総会

５月２２日（土)、南茅部総合センターにおいて、第25回北の縄文CLUB総会を開催しました。各地から10名が参加され、議題各項について協議して満場一致で承認をいただきました。

出席者から、函館地域と南茅部地域を結ぶ川汲山道（道道函館南茅部線）沿線の清掃活動も行ってはどうか、などの提案がありました。

（２）カックウの顔の土鈴づくり

６月１１日（土）午前10時から函館市川汲町の南茅部総合センターを会場として、カックウの顔の土鈴づくりを行いました。 丸い中空のボールの中に小さな粘土玉を入れた土鈴を作り、カックウの写真を参考に、粘土紐を貼り付けたり、ヘラや竹串で刻みや線を彫りつけたりしながら顔を形作ります。丸い顔の福福カックウ・長い顔のおすましカックウなどなど。作り手一人一人のカックウの顔、十人十色。１０月１５日の土器野焼きの際に焼成します。

やさしく優しく、包み込む

誰に似てますか？

（２）土器づくり

８月２０日（土）午前10時から函館市川汲町の南茅部総合センターを会場として土器づくりを行いました。 恒例のものとはいえ、粘土の水分量・部屋の湿度・作り手の体温など毎回状況が違うため難しい作業です。縄文人たちの表現力、確かな手わざを今更ながらに認識しました。

野焼きが楽しみです

(3)縄文土器づくり体験記

縄文文化に触れるようになってまだ日が浅いとは言え、これまで縄文人らしく「やってみた」ということは、黒曜石の鏃づくりと縄文祭りでの火起こしくらい。鏃の時はいかにも刺さらなそうな塊にしかならず、火起こしもせいぜい煙が出るくらいで火を見ることはなく ･･･。 縄文人のすごさを改めて実感する機会となった。そして、遂に縄文人を縄文人たらしめる「縄文土器」づくりに参加することができた。その日程は、8月に粘土で形を作って10月に野焼きという、北の縄文 CLUB の諸先輩方の経験に基づく、乾燥期間を十分取ったスケジュールとなっている。

さて、8月の粘土こねは、果たしてどうだったかというと ･･･ 酷いものである。縄文土器の形はよく見ているはずだったのに、ぼてっとしたものしか自分の手からは出てこない。薄くしようと内側から石でこすっていくと、粘土の重みでふにゃっとつぶれてしまう。そもそも土器の形が不安定なので、装飾に気配りしている余裕なし。

なんとか納めてみたものの、自分が想像していた縄文土器とはかけ離れたものとなった。周りを見回すと、諸先輩方の土器のなんとカッコイイことか。今回もまた、縄文人のすごさを思い知った。どうやって、あの大きな土器を作ったのか ・・・。 ましてや土偶となると、相当な職人技だったに違いない。そして、10月の野焼き。随分前からきまっていたのに、それがわかっていたかのように晴れ渡った空の日、大船遺跡の一角で始まった。これにもちゃんと工程があるということも知らなかった。

いきなり土器を火にくべる訳ではなく、浅い穴を掘り、薪を入れて火を付けて、床の湿気を飛ばし、穴の縁に土器を並べ、さらに十分熱を加えてからいよいよ本焼きに入る。これだって、縄文人は文字を残していないので、初めから分かっていたことではなく、諸先輩のこれまでの経験からできあがった工程で、それをみんなでワイワイ、楽しく、手際よく進めていく。何かの隙に周りで食材を見つけてくる先輩もいる。火には拾ってきたクリがくべられて「おいしい」も一緒だ。なんて豊かな時間だろう。そうこうしているうちに、本焼きの燃え上がった炎も収まり、いよいよ炭と灰の中から土器を取り出す。水につけるとジュウと言って赤くなった。黒く焦げたり何かがこびりついたりと、火の中をくぐり抜けて大変なところから、よくぞ帰ってきた、「お帰り ・・・」 という感じに仕上がっている。手にした土器からは、しっかりと焼き上がった、よい音がした。窯も電気もなくたって、こんな器ができてしまうんだ・・・。 形も厚みも縄目模様も、まだまだ野暮ったい自分の土器と一緒に、今回、諸先輩方のこれまでの経験、つまりは伝統知という得がたいものを、自分は手渡してもらったんだと実感することができた。少しまた、縄文人の心意気に触れられたような気がした。こんな素敵な機会を与えてくださった、北の縄文 CLUB のみなさまに感謝。（了）

（橋本 和彦）

４．関連活動など

（1）はこだて縄文まつり

垣ノ島遺跡で１０月２日、はこだて縄文まつりが開催されました。令和元（2019）年以来の開催です。遺跡内に特設ステージを設け、縄文太鼓の製作・演奏家である茂呂剛伸さんのグループによる縄文太鼓や道教大吹奏楽部の演奏、南茅部高校の生徒によるダンスや書道パフォーマンス、荒到夢形氏による函館縄文講談などが行われました。北の縄文CLUBでは協力として、火起こしや弓矢、土器立体パズルを来場された皆さんに体験していただきました。

ねらいを定めて・・・

チャレンジ精神に点火

火起こし体験では、舞錐式・弓錐式・揉み錐式発火器を使用しました。子どもより大人の方が熱心で、舞錐式発火器では力の限り持ち手を上下し、煙が立ち上ると思わず歓声を上げるという一幕もありました。弓矢体験ではシカなどの動物を紙に描いて的にします。小さな子供たちは初めて弓矢を手にするのか興味津々、慣れてくると百発百中、将来、すぐれたハンターになるのではないかという腕前を見せました。このような体験を通して縄文文化にふれ、縄文人のこころにふれて、親しみを持ってもらいたいと思います。

（2）南茅部地域文化祭

１０月２９･３０日の両日に南茅部総合センターで南茅部地域文化祭が開催され､北の縄文CLUBでも今回作ったカックウの土鈴や土器などを出展しました。

2022年の成果を披露しました

（３）シーニックdeナイト

令和５（2023）年２月２５日、函館市縄文文化交流センター駐車場にてシーニックdeナイトを開催しました。当日は、雪は積もっていましたが雪が降ることはありませんでした。シカ柄や茶・黒などの毛布生地で作った羽織ものを身にまとって縄文人の気分で記念撮影。パラフィンで造ったキャンドルを駐車場の縁に並べてロウソクに火を灯すと、オレンジ色の明かりがあたりを照らします。やがて来る春の暖かさを感じました。

縄文人出現！・・・？

柔らかなキャンドルの灯り

（５）大船遺跡バイパス接続情報

令和５（2023）年３月２５日、国道278号バイパス（尾札部道路）が大船川を渡って大船遺跡上まで延伸開通しました。駐車場も新たに設置され、展示館までここから徒歩で３～５分程度です。今まで使用していた展示館周辺の駐車場には許可を得た場合を除いては駐車できません。下の国道からお越しの際は、道道臼尻豊崎線（下の写真の地図の道道980号線）を経由して上の駐車場に駐車してください。

大船遺跡駐車場新設

(6)丸木舟製作挑戦中

カツラ材の丸太が入手できましたので、小型の丸木舟を製作することにしました。太さは直径 50～60 ㎝で、長さは 5m程度です。野外での留置期間が長かったために材の水分が多く、現在は乾燥中です。今後、状態を見ながら作業する予定です。

５．縄文の発見は自己発見

「よく、縄文や祭や土俗的なものから何を得たかというような質問をされるが、それは困っちゃう。なぜかというと、縄文を発見し、それに強烈に感動したというのは、自己発見だからね。いや自己を新しく確認したと言ったほうがいいな。感動して胸をおどらせたのは、土器のほうじゃなくて、こちらのほうだからね。こちらの血肉が縄文にぶつかっていったわけだから。だから、何々を見て感動したら、どうしましたかと言われると困るね。そもそもこちらにあるものなんだ。それが向こうとぶつかって相互に確認した。相互といったって土器が、ああなるほど、わかりました、なんて言いやしない(笑)。黙っているんだからね。」

これは誰の言葉でしょう？　実は、岡本太郎が宗左近という詩人（このひとも、そうとうな縄文人！）との対談のなかでの言葉です。太郎のいう「4次元の世界」ですね。わたしは、太郎にとっては、4次元の世界との対話がかれのすべての活動のエンジンになっていると考えています。つぎに、「縄文土器論－4次元との対話」というエッセイで見てみましょう。

「原始社会においては、すべてが宗教的であり、呪術的です。」(縄文社会も原始社会？)、「縄文土器はたんに、実用的な目的や美学的な意識によって作られたものではなく、強烈に宗教的・呪術的な意味を帯びており、非日常的かつ、「超自然的な、4次元的性格」を指し示している」と太郎はいいます。縄文人の精神世界は狩猟民族に普遍的な性格を持っており、「狩猟前の、豊猟を祈願する呪術　／　狩猟後の、精霊をなだめる呪術。いわば、狩猟とは呪術にはじまり、呪術に尽きる。」

縄文土器に表された縄文人の世界観を凝縮すると、「この原始のたくましさ、ゆたかさは超自然的な世界とのはげしい、現実的な交渉のうえに成りたっています。自然と人間との、生命のバランスは神秘であり、超自然的に動的であり弁証法的です。あの怪奇で重厚な、苛烈きわまる土器の美観に秘められてあるものは、まさにそのような4次元との対話なのです。」

しかし、「私たちには、すでに4次元との対話はありません。」それでも、太郎はこう言いたいのだろうと思います。あたかも縄文人が超自然の世界と交渉したように、同じく不可視ではありながら、つよく現実的に迫ってくる切実な問題がある。わたしたちは不可能であるゆえに、いま・ここで、この時代にこそ可能な、かぎりなく適切である、「4次元との対話」を継続しなければならないのです。

＜引用＞

＊『ピカソ[ピカソ講義]』(岡本太郎/宗左近 ・ 2009,9)
＊『日本の伝統』「縄文土器論－4次元との対話」(岡本太郎 ・ 1952,2)
＊『岡本太郎の見た日本』（赤坂憲雄 ・ 2020,10）
＊『岡本太郎の見た日本』（赤坂憲雄 ・ 2020,10）

（櫻井 弘之）

2023 年７月１５日　第 25 号発行
発　行　北の縄文ＣＬＵＢ
連絡先　北海道函館市臼尻町 603-1
一般財団法人
道南歴史文化振興財団内
TEL　0138-25-5510
FAX　0138-25-5606